認定監理技師制度への期待と要望 －その８－

論説

世有伯楽、然後有千里馬。
千里馬常有。而伯楽不常有。
故雖有名馬、祇辱於奴隷人之手、
駢死於槽櫪之間、不以千里称也。
馬之千里者、一食或尽粟一石。
食馬者、不知其能千里而食也。
是馬也、雖有千里之能、食不飽、
力不足、才美不外見。
且欲与常馬等、不可得。
安求其能千里也。
策之不以其道。食之不能尽其材。
鳴之而不能通其意。
執策而臨之曰、天下無馬。
嗚呼、其真無馬邪、其真不知馬也。

世に伯楽がいて、初めて千里の馬が見出されるのである。　千里の馬は常にいても、伯楽は常にいるとは限らない。こういうわけで、名馬有りといっても、ただ下僕の手で粗末に扱われ、馬小屋の中で駄馬と首を並べて死に、千里の馬とたたえられることはない。

千里なる馬は、一食にある時は粟を一石食べ尽くす。馬を養う者は、その馬が千里を走る能力があることを知って育てているのではない。この馬に、千里を走る能力があるといっても、食物の量が不十分なので、力を発揮できず、その馬の才能を表に出すことがない。せめて、並みの馬と同じようにと望んでも、それさえできない。どうしてその馬に千里を走る能力を求めることができようか。いや、できない。

馬に鞭を使うのに名馬にふさわしい方法を用いず、育てるのにその才能を発揮させることもできず、馬は人に対して鳴いて訴えても、その思いを伝えることもできない。鞭を手にして、名馬に向かって言うには、「この世に優れた馬はいない。」と。

ああ、いったい本当に名馬がいないのか。それとも、本当に名馬を見分けることができないのか。

＜伯楽＝優れた人材を見抜いて登用する名君、奴隷人＝身分が低く人材を見抜く力のない小役人、千里馬＝優れた才能をもった人物、常馬＝才能のない普通の人物、粟一石＝高い地位や報酬を例えている。小役人が世の中は才能のある人物がいないと嘆くが、それは小役人に人物を見分ける目がないだけで、いてもそれにふさわしい仕事や報酬を与えないので、その才能が生きないだけである。名君とは、優れた人材を見抜く眼力を持ち、厚遇するのでその才能が開花するのである。＞

■　まずは千里の馬を発掘できる伯楽の育成から

2 月 13 日に開催された第２回認定総合監理技師制度検討WG会議で大まかな体系の骨子が決まりました。

到達目標として、初級は、組織内でリーダーシップないしマネジメント能力を発揮し、経営に参画出来るような人材を育成することになりそうです。以下、中級は、組織を目的に向けて牽引出来るリーダーシップを発揮できる人財の成長支援、上級は、組織に留まらず、社会を動かし制度変革・社会変革をもたらし得るようなスーパー人財の発掘と成長の場の提供という高邁なものになりそうです。

初級を認定されなければ中級に進めず、中級をクリアした中でも特別に秀逸な人財だけが上級に進めることになります。

初級は、医の倫理など答申書に挙げられた科目をはじめ、少子・高齢化の急速な進展、政治・経済の変動、医療需要の変化、国民意識の歴史的変遷、雇用・労働形態の変遷などの幅広い知識の習得を主体に、ゼミ方式で学んでいくようです。

本格稼動に向けて、当面は理事が受講生として初級コース構築のための試験運転をしていくようです。名伯楽とはならずとも、全国に点在している千里の馬を一頭でも多く見出すために。

中級は、初級と上級の要求レベルがあまりにも違うため、架け橋として設置される模様です。初級取得をベースに教養を積み増して、論文審査等を経て、選ばれた者が上級に進めるということです。

従って、上級者には真のエリートとしての矜持が必要になります。

■　真のエリートに不可欠な教養とは

「国家の品格」によれば、真のエリートとは、第一に文学、哲学、歴史、芸術、科学といった、何も役に立たないような教養をたっぷり身につけていること。そうした教養を背景に、庶民とは比較にならないような圧倒的な大局観や総合判断力を持っていること。第二に、「いざ」となれば国家国民のために喜んで命を捨てる気概があること、とされています。

では、くどいようですが、教養とは何ぞや・・・・？

世の中には、自分の実利と直結した知識・技能があります。専門家として生きていく上には大切なので、人々はこれを学びます。その他に、自分の実利とは結びつきにくい知識・技能もあります。純文学などは、誰の実利とも結びつきそうにありません。このような知識・技能に富んだ人を「物知り」、「器用な人」と言います。この知識・技能に基づいて社会性のある行動ができる人を「教養人」と言うのだそうです。

教養は、いざと言う時に役立ちます。世の中や周囲の状況が変わると、自らも変えなければ衰退します。自分を変える時に役立つのは、かつて接した分野の知識でしょう。また、状況の変化を察知する能力も、自分の行くべき方向を決めるのに役立つのも教養です。自分の専門の研究を新たに展開する場合にも、行き詰まりを打破する時にも、結局役立つのは教養なのです。

では、どのように教養を学べばよいのでしょうか？
自分の専門とは関係が無い分野で、自分の興味がある分野を重点的に、学ぶ楽しさを味わう。これが教養の大事な条件だそうです。何事にも背景となる原理があります。勉強するときには表面だけでなく、この原理を見透かすように努めなければなりません。これがある程度、出来るようになったら、あまり興味が無かった異分野にも接するようにします。表面上は異なっても、意外に共通点が多いことに気がつくようになるはずです。これが本質とか真理といわれるものに近いものです。こうなると、何を読んでも発見が多くなります。いわゆる、行間の読める人になったということです。知的好奇心が満足され、異分野を学ぶことが楽しくなります。結果的に、自分の視点で見た○○学という見識が形成され、気がつくとそれが多分野に及び、ある朝目覚めると立派な教養人になっていた。

何だかワクワクしてきませんか？

リーダーとして、医療経済、社会情勢、文学、芸術論等の幅広い知識と幅広い見識を持った崇高な人間性、見えないものが見える幸福と不幸。

拙文を書きながら、筆者も、一刻も早く皆様と一緒に学びたい衝動に駆られます。

詳細は、３月の WG 会議で纏まる筈ですので、近日中にこの会報誌面上で明らかにされると思います。

【金子健史】